

カンタベリークラブの思い出



宮古島でのワークキャンプ

マグダラのマリア・上原道子

1959年、私が琉球大学一年次の時カンタベリークラブは創設された。もう50年も前のことであるがつい昨日のようによみがえってくる。記憶というものはその途中でたどった人生を飛び越してしまうので早いものだと感じる。

指導は山本貞彰先生でその頃は大学を卒業したてで私達とあまり年の開きはなかつた。青年牧師の情熱の赴くままに昼夜私達を導いてくださった。美しい奥さんと娘さんも一緒でいつも和やかな雰囲気であった。今思えば先生は東京から派遣されたばかりで全くゼロの出発で私達学生を集めクラブを結成し教会を作るという創始の仕事をしていたのである。大変な緊張と気苦労があったであろう。先生はその気苦労も見せずただ私達学生と楽しそうに、時には宗教や哲学の話を真剣に説きながら過ごされた。教師というよりは兄貴という存在であった。



何と言っても一番の思い出は宮古島でのワークキャンプである。その前に旅費を捻出しなければならない。そのために外人住宅に派遣されていろいろ仕事をした。私はベビーシッターであったが習い覚えた片言の英語で子供たちを遊ばせた。垣間見る外人の家族はとても珍しく為になるものであった。そしていよいよ出発の準備にとりかかった。向こうでは奉仕活動の他に演劇もやるということで脚本

作りからやった。「楊貴妃」という歌劇を皆で演じて役者は素人ながら真剣な舞台づくりをした。バックの音楽はよくわからないので山本先生が「白鳥の湖」の中の哀愁漂う一節を選んで下さった。何で 楊貴妃に白鳥の湖かと思われるがそれが場面と一致してとても良かった。今でもその一節を聞くと思い出すのである。

宮古島では新城牧師夫妻が迎えて下さった。一時に10人余の学生を泊めて大変だったと思うが新婚ほやはやの優しい奥さんと一緒に面倒を見てくださっていた。宮古南静園でのワークショップでは私達の訪問をとても喜んで下さり交流を深めた。たいしたことはできなかったけれど皆で力を合わせて何かやるというこの初めての経験であった。

時は流れたけれどその頃の仲間は今でも会うと昔のようである。数年前山本先生を何十年ぶりかでお迎えしたとき皆集まってお互いに「○○ちゃん」と呼び合っても年をとった感じがしなかったのも不思議である。学生時代の友はそういうものであるとしみじみ思うこの頃である。



時にかなって美しい

カタリナ・永吉京子

私はカンタベリークラブの2期生である。そもそもカンタベリークラブは、当時1年次必修科目の「英語」の講師にW.C.ヘフナー司祭がおられて（その頃は英語科の正規教員数が不足のため、外国人宣教師たちを起用していた）、そのヘフナー先生の受講生たちが中心になり設立された。ヘフナー先生の講義は魅力的で、受講生が定員オーバーするくらい人気の的であつたらしい。余談だが、その受講生の中から数人の米国留学生を輩出した。

ところで、私の高校時代からの友人たちの多くが、ヘフナー先生の受講生で、言うなれば、カンタベリークラブの第1期生である。彼女たちいわく、「色々なプログラムがあって、とても楽しいの。英会話のクラスもあるわよ」と、私を誘った。私は2年次になっていて、4年次のお兄さんたちに混じって「初級英会話」を受講していた。英会話ペラペラの先輩たちの中にいて、聞くことさえ出来ない、全く異次元の世界を彷徨っている状態だった。

そんな折、たまたま目にした「英会話クラスあり。入会大歓迎！！カンタベリークラブ」という張り紙。即、門を叩いた。新メンバーは3名ほど。意外に静かである。あれッ？私を誘った彼女たちはどこに？後で聞くと退会した由。ま、いいか、英会話クラスが目的だから・・・。でも、待てど暮らせど、英会話クラスが開かれる気配はない。顧問の山本貞彰司祭の聖書研究会ばかりが律儀に行われている。聖歌をうたい、祈り、聖書のお勉強・・・こんな筈では、と思いつつも何時よりか仲間と打ち解け、引き込まれるように時は過ぎていった。山本司祭は実に熱心で、若い学生たちを良く理解し、浅学非才なる若者たちであるにもかかわらず、丁寧に接しておられた。

そのうち、池端町のバス停沿いの「モード洋装店」の二階に聖アンデレ教会ができ、暫くして、当蔵町の「大学食堂」の二階に移転した。私たち学生も日曜礼拝に出席するようになり、当山ファミリーや石川富子さん、大田さんご夫妻など大先輩の方とも交流をもつことになる。そして、仲間たちが次々と受洗をする。



3年次を過ぎ、4年次の多忙な時期を送っていた12月のある日、仲良しのK子さんとIさん（現在はご夫婦）が私を訪ねてきて「私たち一緒に洗礼を受けることになったからね、山本先生がいらっしゃいって。」エッ？私も？キツネにつまれた如く教会へ。すると、山本司祭がニコニコして待っておられる。先輩たちや、一緒に受洗予定の友人たちも居る。

聖洗式の説明と教名を、そして教父母を誰にしよう、ということを皆で話し合った。今から思えば、まるで緊急洗礼である。でも、まわりの仲間たちは嬉々としていた。実に晴れがましい表情だ。ひとりオロオロしているのは私だけ。その時、山本司祭がおっしゃった。「京ちゃん、あたらしく生まれ変わるんだよ。赤ん坊は自分の意志で生まれれるのではないからね。」「何も知らない私でもいいですか。」「知らないから、なお、いいのだよ。教父母は家内にしよう。教名はアレキサンドリアのカタリナだ。」

かくして、1962年12月9日受洗、翌週16日に堅信を受けアレキサンドリアのカタリナが新しく誕生したのである。



「神のなされることは皆その時にかなって美しい」

伝道の書3章11節

山本司祭から贈られた聖句を今も大事に誦じている。

51年前の思い出

ウィリアム・佐久本 敏

首里聖アンデレ教会「50年記念」の事、誠におめでとうございます。今後の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。私の思い出は、1959年の夏頃から年が明けての3月までのことになります。わずかな月日でしたが、学生生活最終年次に於いてすばらしい体験をさせていただきました。今もって感謝をしております。

大山盛弘兄との関わりで始まりました。それは聖書研究会への誘いでした。夕方に二人で教育学部の教室に向かいました。沖縄聖公会主催で、今日がその初日とのことでした。教室には数名の女子学生と瘦身の青年聖職者が待っており、その方が山本貞彰先生でした。すぐに講話が始まりました。聖書の解説を予想したが、違いました。先ず黒版に地図を書き、ガリラヤやナザレ、エルサレム等の地名を入れました。キリスト時代のパレスチナである、初めて見る地図でした。山本先生は、主イエス・キリストが御国の福音を宣べ伝えるところから始めました。その語り口は、奇跡を行う人物をあたかも現実に実在する青年を紹介するようなものでした。私のような未信徒にはよく分からないのだが面白い物語として受けとめていました。

それから数週間後のことだろうか、大山兄からカンタベリークラブを結成するので是非参加するようにとの連絡がありました。山本先生はクラブ名の由来について、イギリスのカンタベリー大聖堂に於いて創始されたものであること、そして今では世界各地にあると説明されました。最後に「我等も数年後の世界大会に参加したい」と結びました。すぐにもイギリスに渡りたいとの気勢には驚かされました。

大風呂敷の広げすぎとしか思えなかつたが、その数ヶ月後にもなると、この先生なら可能にするだろと思うようになっていました。名簿には各自で記入した、10名ほどの氏名があったと思います。大山兄がクラブ長に就きました。琉大の掲示板にはカンタベリークラブの「お知らせ」が目立つ様になりました。ピクニックや英会話講座開催等でした。学生も急増し、活動は彩に展開しました。その一つに「アンデレ学院」があります。

小学生対象の学習支援活動です。大勢の児童が集まりました。カンタベリークラブ学生たちは張り切りました。教室は広く、母親たちも参加して賑やかでした。その内に、びっくりするようなことが起きました。八代斌助主教様の突然の訪問でした。学生達は大いにほめられました。さらにその数日後に、山本先生から色

紙を手渡されました。「我が魂は幼児の如くあらかなり」為、佐久本兄、八代斌助、とあった。とてつもない宝物を頂戴ました。当時に、八代主教様とは何度もお会いできました。講演会も開催されました。著書も入手できました。「キリスト教は啓示の宗教である」などのお言葉は私の道しるべでした。



衝撃的な想い出に、愛樂園と宮古南静園への訪問があります。山本先生が用意した寸劇を学生たちは熱心に何とかこなしました。つたない演技に拍手をくださいました。慰問されたのは私達でした。講堂には大勢の方々が居られました。予想外のことばかりでした。聖公会信徒の方々との懇談会で感じたのは山本先生が

言っておられた「あの人達の信仰はただものではない」ことを裏づけるものでした。

宮古訪問の旅費工面のためにはエドモンド・D・ブラウニング司祭様が一役買って下さいました。私に割当てられたのは米国人信徒のガーデンボーイでした。また学生達を夕食に招待して下さいました。初めて入る司祭館とそのご家族に、我達は興味深々でした。後々に、沖縄教区主教就任後に、よく耳にしました。「私は宣教者である」などの言葉を考え合わせると、当時から、山本先生と共に同様な考えの基で宣教活動をおられたのでしょう。

W・C・ヘフナ司祭様、学生には親切でした。「学生センター」構想の責任者であったはずです。山本司祭の支援に、八代主教様と共に、学生のためのプロジェクトに全力を尽くされたと聞いています。

想い出の一つに当時のナザレ幼稚園の玄関に掲げてあった「神の子」の扁額とその下で、園児たちと立っておられる長身・瘦躯のヘフナ司祭様の姿です。まるでイコンのように焼き付いています。

カンタベリークラブの隆盛は目を見張る勢いでした。卒業式を迎える頃には、玉陵に隣接するススキの原野で、八代主教司式による学生センターと首里聖アンデレ教会用地の聖別式も終えていました。私は北部の中学校に赴任し、首里聖アンデレ教会建立の戦いの音は遠雷のようありました。

慰問と奉仕

グレゴリー・城間源哲

もっともらしいこのタイトルでいいのか、最後まで迷った。自分達はそのつもりだが、はたして先方にとって、どれほどの意味があったかあやしいからである。相手を思う深い分別はなく、ただ、エネルギー、情熱だけはもてあります程あった。首里聖アンデレ教会にお世話になっていた頃のカンタベリークラブの話である。

みどり丸は元軍用船だから沈むことはないということだった。高波は、デッキを右から左に、左から右に、しぶきを上げてしきりに横切った。船は波に乗ってではなく、波の下をくぐって進んでいた。さすが、鉄船と言われるだけのことはある。当時の離島航路はまだ木造船が主流だった。

船室のカンタベリーの仲間のほぼ全員が船酔いに苦しんでいた。部員が手で口を押さえると素早く洗面器を渡すのが私の役目だった。ところが、みんなのオツーという呻きを何度も聞いている内に、自分の方も危うくもどしそうになり、デッキに逃れて柵にしがみついていたのである。

そのような状態の船室で、山本先生は熱心に台詞を稽古していた。先生にも、端役ではあるが、劇中の登場人物として、語る場面があったからである。先生の出演する演目は、お馴染の「放蕩息子」だった。その他に「楊貴妃」なるものを準備して、宮古慰問公演をと考えての船旅である。

音楽は音楽部の者が担当し、振付は家政学部と教育学部の女子学生が考えた。振付で傑作だったのは「楊貴妃」のチャイナ服である。舞台衣装を作る金はない、それでもチャイナ服でなくては舞台設定に合わない。そこで考えついたのが、着物の背を前にして逆に着ることだった。すると、着物の襟首が喉のところに当たり見るからにチャイナ服になった。

実は、こんなドタバタ劇で、慰問と称して南静園を訪問したのである。その企画、立ち稽古、全て聖アンデレ教会でやらせてもらった。大学食堂の二階、20畳



程の豊間である。七味のきいた沖縄ソバを食べながらの稽古だった。カンタベリークラブは正式に登録した琉大キャンパスのクラブだが、実際の活動の本拠地は聖アンデレに置いていた。50年前のことである。

南静園に籍を置く聖公会の信徒さんがいろいろお世話をしてくれた。何名かのお顔が思い浮かぶが、今はどうしておられるか。「いろんな慰問でみんな目が肥えているので心配したが、素晴らしい」と口々にわれわれ学生を励ましてくれた。

南静園の前夜は宮古婦人会館に満席のお客さんが来てくれた。観る物が少ない時代だったこと、土地の2局のラジオ放送で無料で宣伝させてもらったのがよかったです。地方だからと油断していたら、ぴたりと時間通りに大勢の来場があったのにわが団員一同あわてた。

この20名近い大勢の者の旅が、無銭飲食の旅だったことをわれわれは忘れてはいない。50年前だから、今更だが、新城喬先生ご夫妻、お世話になりました。

ちなみに、このみどり丸が三角波を受け泊港沖で沈没したのはその数年後である。

エネルギーの燃焼と自己鍛錬を兼ねて、辺土名公民館の幼稚園敷地の整地を引き受けた。「誰が先にぶつ倒れるか」という乱暴なテーマだった。夏休みのワークキャンプ地として労働の場を提供してもらったのである。建築資金がやっとだったとかで、整地費がなかったらしく、母親の皆さんからは歓迎された。

岩山の下にある500坪程の庭は、岩だらけで凸凹が激しく、いきなり表面をならすことはできなかった。全面的に耕し、石を取り除き、一度畑のような状態にしてから平らにすることにした。たしかに激しい労働ではあったが、深い森から降りてくる早朝のさわやかな風、天然記念物の“ノグチゲラ”の身近な囁き、毎日が別天地にいる思いだった。

整地作業が終了間近になった頃、園児のお母さん達から大量の缶詰の差し入れがあり、貧しいわれらの台所はいっきに豊かなメニューに変わった。そのお礼にお母さん方に何曲も合唱を披露した。一曲ごとに拍手をもらった。が、拍手の通り感動したか、それとも早く帰してほしいと思ったかは解らない。何しろカンタベリークラブの合唱団、カンタベリーグリーとしては何曲もの持ち歌があるから、次から次へと止まらなかったのである。



アンデレと共に移動するわれわれの活動拠点はやがて寒川に移り、西川先生御夫妻のお世話になる。「薬草が入っているのでこの湯は流さないで下さい」と書かれた温かい湯ぶねにみんなしてよく入れてもらった。聖アンデレチャペルの建立が間近な頃である。

